

橋本さんちはインサイ
ドラゴン

ハヤさん。

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

システムエンジニアになってまだ日が浅い会社員、橋本 隼斗

空間の裂け目に飛ばされ力を失った光のドラゴン、リントヴルム。

二人は、自分のいる世界に馴染めず、違和感のある毎日を過ごしていた。しかし、ある日の出会いによって、二人のずれたピースは、互いに当てはまり合い、二人を世界へと馴染ませてくれた。

これは、そんな一人と一匹、それを囲む様々な人を描いた、イシユカンコミニケーション。

誰かの居場所になってあげる事。それが繋がって、一つの輪になる事。それが、家族

になるって事。そこに、ドラゴンも人も、関係ない：：

「ちよつと橋本さん。今ボス倒せそうなんです。邪魔しないでください」

：：
ま、ニートラゴンなんですけどね。

目次

第一話 二人の運命の出会い！（一人と一匹なんですけどね）	1
第二話 我が名はリントヴルム！！（後々ニートヴルムになります）	12
第三話 ドラゴンなんです！！（はいはい）	20

第一話 二人の運命の出会い！（一人と一匹なんですけどね）

ドラゴン。それは、最強の生物。

火を吹き、空を舞い、牙で喰らい、爪で切り裂き、魔法を放つ。RPGではラスボスとして、神様として、最強の仲間として登場する。

あらゆる伝説では、ドラゴンを倒す事で英雄となつた者も少なくない。

結論を導き出そう。ドラゴンとは、最強の生物である。

……はずなんだ。

「どうしてこうなつた……」

「ん？ どうしたんですか？ ……あ、また死んだ……」

家に引きこもりネットゲをプレイし、だらしのないパジャマ姿のまま過ごしているのが、正義の象徴、光輝く龍「リントヴルム」のはずがないのだ。

「この私、」閃光龍リントヴルム「を殺した事、後悔させてやるわあああああ!!!」

リントヴルムらしいです（白目）

時は、三日程前に遡る。

「……んー……ふう」

俺はキーボードを打っていた手を止め、腕を上突き出し、大きく伸びをする。何時間やっていただろう……3時間程か。そりゃ腰も固まるわけだ。まるで石化でもしたかのように、俺の腰と背中凝り固まっていた。この状態で伸びをすると逆に痛い。

「お疲れー、橋本君」

「あ、滝谷先輩。お疲れ様です」

「はいこれ。どう？ 調子は」

俺は滝谷先輩から、冷たい缶のカフェオレを頂く。あー、冷えた缶が気持ち良い。「ありがとうございます。取り敢えず前半は終了しました。でも、ここからです」

システム系の仕事はこれだから嫌だ。上の命令は絶対だし、ミスやバグは全てのシステムに支障をきたす。他の仕事だってミスが許されるわけではないが、システムエンジニアというのは、より精密で正確な技術と、ミスを犯さない丁寧さが求められる。……や

るんじやなかったよん。

主に俺が行うのは、操作システムを中心とする“オペレータ”と呼ばれる役割だ。まだSE（システムエンジニア）になって半年。ここまでの大役をこなした事が無く、俺には少々厳しい。：。まあ、全然下位のオペレータなんですけどね。メインじやないし。若手だし。

「そう。うちもうちで頑張ってるから、気を抜かないようにね」

「はい！ 精一杯努めさせていただきますす！」

俺がそう言うと、滝谷先輩はにっこりと微笑み、自分の席へと戻っていった。：。何と素晴らしい先輩なんだろうか。こんな底辺の俺を気にかけて、カフェオレを奢り、微笑みかけてくれるだなんて。何故あれで彼女居ないんだろう。？ 不思議だ。

「んー。よし、あともう一踏ん張り。：。」

俺は、カフェオレを飲み干し、再度パソコンへと向かった。

今日も今日とて、爽快なキーボードの音が社内に響き渡る。その一部に自分が入ってるんだと思うと、それも悪くなかった。

「…終わったああ…」

やった、やったぞ。やり切った。時刻、午後9時。残業に入る前に全て終わらせる事ができた。机を押し、システムチェアのタイヤが回る。後ろへ押し出された俺は、無防備にだらしなく四肢を投げ出し、天井を見上げた…。これで、経費虫と呼ばれずに済む。新人って残業するとなんか嫌な目で見られるよね。

「お疲れ様、橋本君」

「お疲れー、橋本君」

「わっ、小林さん！ 滝谷先輩！」

いきなり声を掛けられ、慌てて振り返るとそこには、同じくSEの小林さんと、滝谷先輩が微笑み立っていた。

「お、お疲れ様です！」

「うん。お疲れ様。今から滝谷君と飲みに行くんだけど、橋本君も来る？」

「え!?! ほんとですか!?! 行きます！」

俺達には、ある秘密がある。会社の皆さんには知られていない、ある秘密が。

「だーかーらー!! 私に興味は基本的に忠実なメイドなの!! メイド喫茶なんて求めてねえんだよ!!」

「しかし!! 最近のメイド喫茶には、メイド好きには堪らない心の奥底に眠る獣欲を掻き立てる物があるのでヤンス!!」

「…猫耳とか、堪りませんよね… フヒツ」

そう。俺達は、日頃の疲れやストレスを発散するため、飲み屋で日々オタク談話を繰り広げているのだ。小林さんは、最近では珍しい昔ながらのメイドが好きなようで。日頃の20代とは思えない淡泊で冷静な小林さんは、メイドになると凄まじいマシンガントークを繰り広げる。

滝谷先輩は、オタクもオタクらしいオタク。何故か瓶底眼鏡に出っ歯になる。なんでも、表と裏を使い分けているらしい。

そして俺は、酔うと唐突に黙るタイプ。全くと言って良いほど喋らないが、喋ると必ずフヒツと笑うらしい。気持ち悪い。

「つたく… あーあ… 誰かメイドになってくんねーかなあ…」

「それでヤンスねえ…」

「…」

多分、きつと。俺達は何処かで、世界と繋がれなかった。世界から隔絶された。だから、馴染めなかった。二人はそう思っていないかもしれないけど……俺は、こういう時にこそ、そう感じる。

ここじゃない。そうじゃない。小さな頃から、ずっとそう感じていた。馴染めなかった。"そこ"に。本来、そうあるべきであり、そうならざるを得ない場所が、自分に合っていないと感じていた。"そこ"にいるのは必然で、必須のはずなのに。まるで、パズルのピースが、ずれているかのように。そのずれたピースが、自分であるかのように。でも、今この瞬間、この場所で、この二人となら。自分のピースが、ぴったり当てはまっていると感じる。世界に馴染んでいる気がする。自分の場所は、ここなんだと感じる。ここにるのが必然で、必須であると感じる。そう思えるから、自然と、笑みがこぼれていた。

「……小林さん、大丈夫なんですかね……？」

「さあ……まあでも、いつもあれでちゃんと帰ってるからね。あまり心配は無いよ」

めっちゃやベロンベロンだったんだけど。最早別人。拳句の果てには、居酒屋の女性店員にまでメイドになれとか言い出すし。セクハラやん。

「んじや、そろそろお開きにしますかね。お疲れ、橋本君」

「あ、はい。お疲れ様でした、滝谷先輩」

手を振りながら、滝谷先輩は駅前の人混みの中へ入っていき、姿は見えなくなつた。．．．なんか、切り替え早すぎない？

「．．．帰るか」

明日は二日酔いだな．．． おえつぶ。

今日、この日。何気ない日常は過ぎていき、今日は終わろうとしている。月は沈み、太陽は朝へと昇ってくる。月はまだ見えているけれど、もうじき沈み、空は静寂に包まれる。そんな夜道を歩いている。

だから、それは日常の何気ない一コマである。俺が、馴染む事の出来ない日常の一コマである。

じゃあ。

ずれたピースに、”ずれたピースを当てはめてみよう”。

それはきつと、綺麗に当てはまって、綺麗なパズルが完成するはずだ。

「…誰か、倒れてる…？」

そう。誰か倒れてる。それはもう、ばつたりと。暗闇だから、よくは見えないが、確かに誰か倒れてる。

すぐさま駆け寄る。うつ伏せに倒れており、急いで状態を起こして、仰向けの状態にする。

ぶるん。

…ん？ ぶるん？

ぶるん。

今、明らかに並大抵の人間じゃ起きない擬音が聞こえた気がする。

倒れていた人は、明らかに女性だった。艶のある、綺麗な白肌。頬はほんのりと蒸気しており、真っ白な肌は少し赤らみを帯びている。そして、暗闇でも際立つ、綺麗な白髪。外国人だろうか？ しかし、顔は日本人のような顔立ちだ。お年寄りでもない。

ぶるん。

…うん。目を逸らしちゃいけないな。うん。てか目が引き寄せられるね。万乳引

力かな？

常人女性じゃ、考えられないほどの巨乳。大き過ぎというわけでもない、綺麗な形で、大きい。それが、月明かりに照らされて、大きく弾む。

そして：：それを包むはずの服は：：まるで引き裂かれたかのようにぼろぼろになつていた。

「：：とりあえず、息はある。：：仕方ない、か」

家に連れ帰つて、看病してあげよう。流石に、倒れていた女性を見捨てるなんて事はできない。下心なんて微塵もないし。

ぶるん。

：：おっふ。

俺は、背中に感じる柔らかい感触にドギマギしながら、倒れていた女性を背負い再び帰路に戻った。

△

▼

△

▼△

▼

暗い。痛い。怖い。やめて…。もう来ないで。違う、違うの。私は、私は…
あなた達と、友達になりたいだけなのに。

なんで、どうして？ 何でわかってくれないの？ 私が、”ドラゴン”だから？
あなた達は、私がドラゴンってわかった瞬間、剣を持って、私を貫こうとした。ドラゴン
と、人は、わかり合う事はできないの？ そんなの嫌だ。そんなの、認めない。

でも…。私、もう駄目かも。こんなの、繰り返し。信じては裏切られ、信じては裏
切られ。もう…。人間なんて…

「…ん…」

あれ？ ここは…？ 私…どうしたんだっけ。

「あ、目覚めましたか？ 身体の具合は？」

え…？ 人間？ 何で、ここに…？ まさか、私を助けてくれた、の？

「とりあえず、今は横になっててください」

彼は、そう言いながら水を出してくれる。そして、おしぼりを持って、私の顔を拭い
てくれた。

「…あの、私…」

「記憶が混乱してるでしょう？ 今は横になってください」

：： そう、ですね：： 今は、ただ、眠りたい。

私は、もう一度目を閉じ、毎夜している想像を、瞼の裏に焼き付ける。私の隣には、私の大好きな人がいる。顔はまだわからない。そして、彼は私の手を握ってくれる。そんな日常。

そんな想像をしながら、私は再び眠りについた。

第二話 我が名はリントヴルム!!（後々ニートヴルムになります）

「…んーっ…ふああ…」

小鳥の心地よい鳴き声は聞こえない。眩しい朝日が射し込んでくる事もない。誰かが起こしてくれたわけでもない。何も起きない俺の朝は、何もなく始まる。

「… z z z z z z」

すみません。ありました。なんかありました。

何と。俺のベッドの上には、美しい女性が、安らかな寝息を立て寝ているのだ。あ、俺は床ですよ？ おかげで腰が痛い。

ぐっすり寝ている様子を見ると、容体は安定しているようだ。別段苦しそうな様子もなく、静かに寝ている…。しっかし、こうして見るととても綺麗な人だ。傷んだ様子のない綺麗な白髪は、街に降る新雪を思わせ、妖精のような可愛らしい顔を見せる…。正直言つて、かなり可愛い。

「…ん…」

「ひっ!!」

いや、ひっ!! っって何だ。ただ声出しただけじゃないか。何慌ててんだ。てか寝返りうってるし。何と心地よく寝てますこと。俺ってコミュ障なのかな? いや、それは無いな。

「:.. んう..」

「ひっ!!」

コミュ障でした(白目) :.. てかさつきもこんな感じだったぞ。

:.. 彼女が起きたらどうしようか。とりあえず、通報されないようにしよう。うん。

:.. 暖かい:.. 大抵、寒空の下寝るのが当たり前だったのに:..。こんな暖かい状態で寝るのなんて:.. ”龍” の時以来か。龍は良いなあ。暖かくたって寒くたって変わらないし。何処でだって寝れる。そんな事を考えると、やっぱり龍の方が良いのかなあ:..。

:.. 駄目。流されちゃ、駄目。決めたじゃない、”リントヴルム”。私は、”龍である事を捨てたんだ”。私は、もう、ドラゴンじゃ、ないんだ:..。

「…ん… あ…」

「ひっ!!」

… 声? 誰か、いるの? … まさか… 人間に捕まった? … しまった… !!

油断した…! … まさか… 今ここは… 火の上… ?

「… あれ… ?」

これ、布団? … 少し薄いけど、布団だ。毛布もかかって… あれ? … あれ? … 私、何

で、ここに… ?

「あの… えーつと… 起きました、か?」

声のした方を向くと、温かいお粥を用意している男の人の姿があつた… 何で怯え

てる?

「あの、ここは?」

「あ、俺の家です。昨日、あなたが倒れてたんで、俺ん家に連れてきたんです、けど…」

昨日? … 私、倒れて… ? … そうだ。昨日… 私… 人間に… !!!

「… ニン… ゲン…」

蘇りそうになる、ドラゴンとしての本能。心の底から、身体の内から湧き上がる殺戮本能。目の前にいる、この“ニンゲン”を殺したいという、憎悪。嫌悪。駄目… 止ま

らない：：！！ コイツヲコロシタ：：

「お腹空いてませんか？ お粥作ったんで、良ければ：：あと、お水とおしぼり、あ、母さんが作ってくれた漬物もありますし：：」

そうやって、彼は美味しそうなお粥を出してくれた。

：：グーっ：：

：： お腹、空いた：：。そういえば、ちゃんと食べたのって、いつだっけ：：。

そう考えたら、目の前にあるお粥に、いつの間にか飛びついていた。

「：：っ：：っ：：！！」

れんげでお米を掬い、口に運ぶ。噛む。飲み込む。

美味しい。美味しい。美味しい：：！！ 温かいお米がお腹に入ってくるのがわかる。

薄い味付けだけど、今の私には豪華過ぎる食事だ。一瞬にして食べ終わってしまった。

「お腹、空いてたんですね。もう少し食べますか？」

「……」コクリ

さっきの怒りも殺意も忘れて、私は目の前にある食事に取りついた。目からは、涙が溢れ、止まらなかった。

…… おおう。凄い食べるなこの人。既に三杯も食べてるし…… まあいいか。今月の食費が心配だけど、今はこの人が満足するまで作ってあげよう。何故漬物に手を出さないのかは触れないでおこう。

「……ふう……」

四杯目を食べ終わり、お腹一杯になったのか、お椀をお盆の上に置き、一息つく。

「……」

「…… ええー…… つと。もう少し食べますか？」

「… ふっ… うう…」

… 泣き出した。なんかこう… 泣き出した。何だ。四杯も食べた挙句、やっぱ不味いと。泣くほど不味いと申すのか。この女子は… なわけないか…。そんなんだつたら俺が泣くわ。一晚泣くわ。

「… ありがとう、ごさいます… !!」

「… お粗末様でした」

まあとりあえず。美味しくいただいたようで何よりです。

「… それで、とりあえず話を聞きたいんですけども」

「… はい。その前に、助けていただき、ありがとうございます」

そう言つて、綺麗にお辞儀する彼女。

「… 申し上げにくいのですが、事情を話すわけにはいきません」

「… そうですか。それじゃあ聞きません」

「… へ？」

いや、申し上げにくい事無理に聞かないし、俺。しかも相手は女性。言いにくい事だ

らけだろう。こんな容姿じゃ、凄いとこのお嬢さんかもしれないし。

「あの、聞かないんですか…？」

「聞いてほしいなら」

「っ…」

…これでもいいのだろう。俺がここで彼女の事情を聞かないのは、きつと正しい選択だ。分岐ルートも、バッドエンドルートも、そして、ハッピーエンドさえも発生しない、ノーマルエンド。ここで彼女は家を出て、俺は会社に行く。なんと幸せなエンドか。相手の日常も、俺の日常も何も変わらない。これで、良いん

「…私、”ドラゴン”なんです」

「…は？」

は？ …は？ 今、何て言った？ ドラゴン？ ドラゴン？ どちらくん？

「私の名前はリントヴルム。無理を承知でお願いします。私をここに、置いてくれませんか？」

今ここに、二つのずれたピースが生まれた。その距離は遠く、合わさる事などまだ早

い。だが、しっかりと、二つのピースは生まれ、互いに引き合おうとしている。彼の平和な日常は、今終わりを告げた。そして、彼の、不思議な日常が始まる。まずは、目の前のドラゴンと。

第三話 ドラゴンなんです!! (はいはい)

「無理を承知でお願いします。私を、ここに置いてはくさいませんか? : : ?」

何で私は、見ず知らずの彼にいきなりこんな事を言っているのだろうか? 優しくされたから? ご飯をご馳走してくれたから? : : ううん。違う。そんな事は、今までにもあった。優しくされた事だってあるし、ご飯をご馳走してくれた事もある。じゃあ、何で?

私が、ドラゴンである事を打ち明けた瞬間、人間は私を殺そうとする。

じゃあ、彼は?

これは賭けだ。私が、これからも人間を信じ続けるか。それとも、人間を殺しに行くか。元の私に戻るかの賭け。何と身勝手な事か。いや、そうとも限らないか。私がドラゴンである事を知った瞬間、彼は私を殺そうとする。私は、それに対抗して彼を殺すだけだ。正当防衛だ。しかし、私をベッドで寝かせてくれて、食事までご馳走してくれた彼を殺すのは、心苦しい。

さあ、あなたはどっち? 殺す? 殺さない?

「… えっと… 頭イタイ子なのかな? ドラゴンとか結構ワロスなんだけど…」

まさかの三択目。笑われた。

「なっ、笑いますか!? ドラゴンであるこの私を愚弄すると言うのですか!」

「いやだって… ぷつくく… 助けた女の子がまさかドラゴン系中二病とか… どのラノベだよ… くくっ」

… 意味が分からない。だって、人間は、例えばそれが嘘だったとしても、相手がドラゴンだと言えば、すぐさま殺そうとするのに。何故彼は私がドラゴンだって事を笑う? 彼はドラゴンが怖くないのか?

「このご時世ドラゴン系中二病は流行んないよ。だってドラゴンとか居ないし… 居たら良いんだけどなあ…」

居たら… 良い!? どういう事なんだ? 彼の頭が狂っているのか… まさか…

ここって… !!!

「… すみません、ここって… ?」

「ここ? そっか、ドラゴンって大抵外国だもんな。ふふ、ではこの私が、伝説のドラゴン殿に教えてしんぜよう。ここは、龍の住まう国、日本だ!!」

ニッポン… ? ニッポンって… いや、無かったはずだ。”私の知ってる世界では

ニッポンなんて国は無かった”

つまり、ここは……

「……やってしまったあ……」

「え？ どうした？ 来る国間違った？」

「そうだ。思い出した。私は……」時空の裂け目”に飛び込んでしまったんだ。だが、作ったのかも分からない、時空の裂け目に。命からがら逃げ込んだ先が、まさか別の世界だったなんて。

「おかしいと思った。この家の内装も見えない物ばかりだし、あの四角い物体とか何なんだ。そして、ドラゴン相手にこの様子。ましてや笑ってきやがった。

「えつと……その……じゃあ証拠見せますね」

「お？ まじで？ 火とか吹くの？」

「いえ、私は雷と光のドラゴンなんで……雷出しますね」

「うおおー!! まじかキタコレ！」

「そう言つて彼は、何に使うのか分からない不思議な薄平べつたい物を出して構えた……武器には見えないし、魔力も感じられない。大丈夫だろう。」

私は、手の平を天井に向けて呪文を唱える。

「レクレール」

そう言うと、手の平からバチつと白い雷が現れる。それは徐々に大きくなり、手の平の上には超高密度の電球が出現した。

「… え？ え？ 嘘、まじで？ これ… 嘘!？」

凄く同様している。恐らく信じて無かったのだろう。この世界は、魔力も魔獣もないのだろうし。

「… ドラゴンにも変身できますけど、ここじゃ狭いですね…」

「うっそ… まじでドラゴンなの…!？」

ええ。まじでドラゴンです。

「… あっ!! もうこんな時間かよ!? まずい…」

彼はそう言うと、急いで着替え始める… 何となく気恥ずかしくて後ろを向く。

「ああまずい!! 間に合わない… ねえ!!」

「はい?」

「転送魔法とか無いの!? なんかこう… ビュバーっと思いつりるところへ行けるやつ!!」

「一応ありますけど… じゃあ行きたいところを思い浮かべてください」

「… いきなり現れたらやばいし、トイレで良いか。おっけー!!」

「では… テレポーテーション」

そう眩くと、彼の姿は白い粒子へと変換され、後には何も残らなかった。

…
え!?! 私一人!?!